平成27年度　文部科学省委託事業

報告書
REPORT

アセアン加盟国中学生招聘交流事業

Aグループ　10月20日（火）～ 10月30日（金）

【インドネシア･フィリピン･ベトナム】
国立乗鞍青少年交流の家

【ラオス・ミャンマー】
国立江田島青少年交流の家

Bグループ　11月19日(木)～11月29日(日)

【マレーシア・タイ】
国立花山青少年自然の家

【ブルネイ・カンボジア・シンガポール】
国立信州高遠青少年自然の家

実施：国立青少年教育振興機構　協力：アスジャ・インターナショナル/アスコジャ

〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町3-1　URL　http://www.niye.go.jp

事業概要

1　趣旨

ASEAN諸国で日本に興味関心のある中学生を招聘し、国立青少年教育施設を拠点に、地域の特性を生かした自然体験、文化体験、日本の青少年との交流体験を通して、日本に対する理解の増進を図る。また、日本の青少年に対して国際的視野の醸成、次世代リーダーの養成を図る。

2　主催

文部科学省

3　実施

国立青少年教育振興機構

4　協力

アスジャ・インターナショナル／アスコジャ

5　企画委員会

〈外部委員〉

太田　　隆文　（日本学生支援機構留学生事業部留学情報課長）
金藤　ふゆ子　（文教大学教授）
萩原　知加子　（アスジャ・インターナショナル事務局）
森下　雄一郎　（公益財団法人夢現エデュテイメント代表理事）
山根　　一毅　（公益財団法人日本ＹＭＣＡ同盟協力部門国際担当主任主事）

〈地方教育施設委員〉

吉川　　師弘　（国立乗鞍青少年交流の家企画指導専門職）
福江　　大幸　（国立江田島青少年交流の家主任企画指導専門職）
狩野　　浩二　（国立花山青少年自然の家主任企画指導専門職）
山﨑　　重幸　（国立信州高遠青少年自然の家企画指導専門職）

6　プログラム構成

（１）地方教育施設独自プログラム〔前半８日間〕

招聘者を受け入れる地方教育施設が、各施設の特性を生かしたプログラムを実施する。
なお、各施設毎に企画委員会を開催し、教育効果の高い交流プログラムを企画している。

（２）東京プログラム〔後半３日間〕

各国大使館訪問、各国からの留学生が引率する都内自主研修、評価会を実施する。

7　日程・受入地方教育施設・招聘国

Ａグループ：１０月２０日（火）～１０月３０日（金）　１１日間

国立乗鞍青少年交流の家　　（インドネシア、フィリピン、ベトナム）
国立江田島青少年交流の家　（ラオス、ミャンマー）

Ｂグループ：１１月１９日（木）～１１月２９日（日）　１１日間

国立花山青少年自然の家　　（マレーシア、タイ）
国立信州高遠青少年自然の家（ブルネイ、カンボジア、シンガポール）

8　参加者数

（１）日本の青少年

国立乗鞍青少年交流の家	１３名
国立江田島青少年交流の家	１５名
国立花山青少年自然の家	１３名
国立信州高遠青少年自然の家	２１名

（２）招聘者

アセアン諸国の青少年	各国６名	計６０名
各国引率者（英語・日本語を話せる者）	各国１名	計１０名

「アセアン加盟国中学生招聘交流事業」運営施設

【国立乗鞍青少年交流の家（岐阜県）】
Aグループ：10月20日（火）～ 10月28日（水）
招聘国：インドネシア、フィリピン、ベトナム

【国立信州高遠青少年自然の家（長野県）】
Bグループ：11月19日（木）～11月27日（金）
招聘国：ブルネイ、カンボジア、シンガポール

【国立花山青少年自然の家（宮城県）】
Bグループ：11月19日（木）～11月27日（金）
招聘国：マレーシア、タイ

【国立江田島青少年交流の家（広島県）】
Aグループ：10月20日（火）～ 10月28日（水）
招聘国：ラオス、ミャンマー

【国立青少年教育振興機構（東京都）】
Aグループ：10月28日（水）～10月30日（金）
招聘国：インドネシア、フィリピン、ベトナム、ラオス、ミャンマー
Bグループ：11月27日（金）～11月29日（日）
招聘国：マレーシア、タイ、ブルネイ、カンボジア、シンガポール

アセアン諸国と日本の青少年の交流事業の成果と意義

アセアン諸国と日本の青少年の交流を目的とする本事業は、2011年度より文部科学省の財政的支援を得て計画・実施されてきました。本年度は５年目を迎え、過年度までのプログラムの更なる改善や新たな工夫を凝らしたプログラムが実施されました。

本年度の取り組みの中で着目したい点は数多くありますが、その中でも特に注目したい事例を述べるとすれば、以下の事項が挙げられます。信州高遠のプログラムでは(1) 企画委員会での提案を受けて、日本とＡＳＥＡＮ諸国の青少年がそれぞれの地域課題と課題解決に向けた意見交換を行ったこと。同じく高遠のプログラムは(2)ブルネイの参加者が帰国後も高遠中学校の生徒とやりとりを続けており、東京で行った評価会で発表したプロジェクトの実現を目指していること。江田島のプログラムでは(3)過年度に参加した生徒が、今年度の参加予定者である青少年を対象とする事前研修に参加し、過去の経験を踏まえたアドバイスを行ったなどです。

それらの取り組みは本事業が決して単発的なものではなく、過去に実施したプログラムの改善点や改良点を検討し、PDCAサイクルに基づくより質的に優れたプログラムを計画・実施した事実を示しています。過去のプログラム経験者が次の参加者へと彼らの知識や経験を伝達し、青少年のリーダー養成が青少年間で繋がる取り組みや、地域課題の検討からグローバルな人材養成を目指す内容は、青少年リーダー養成のプログラムとして非常に優れた実践であったと考えられます。

他の施設のプログラムにおいても、日本の青少年が中心的役割を果たしながら多種多様な体験を通じた学習の機会を創出しました。その成果は、青少年自身の(1)各種プログラムの企画・立案能力の伸長、(2)国際交流を通じたコミュニケーション能力の伸長とその重要性への認識の高まり、さらには(3)様々な企画や東京での評価会を通じたアセアン諸国の青少年との信頼関係の構築として現れており、本報告書にそれらがまとめられています。

そうした成果を踏まえると、本事業はＡＳＥＡＮ諸国の青少年はもとより、彼らと触れ合う機会を持った日本の全ての児童生徒にとって人間形成上、非常に意義あるものと言えるでしょう。今後の未来を担うアセアン諸国と日本の青少年が、本事業をきっかけとしてさらに親交を深め、自国はもとより東アジア全体や世界の発展に寄与する人材となることを切に願います。最後となりましたが、本事業の計画・実施にあたり多大なご支援を頂きました各施設職員の皆様、学校関係者、保護者、地域の方々など関係者の皆様に心より御礼を申しあげます。

（本部企画委員会委員長　金藤ふゆ子）

Aグループ　地方教育施設プログラム

10月20日（火）～ 10月28日（水）

●国立乗鞍青少年交流の家

日本

フィリピン

インドネシア

ベトナム

●国立江田島青少年交流の家

日本

ミャンマー

ラオス

インドネシア・フィリピン・ベトナム
（国立乗鞍青少年交流の家）

日本人参加者の日程　日本人参加者（13名）の日程

期　日	内　　容
7月24日（金）	第1回交流プログラム打合会
9月12日（土）	第2回交流プログラム打合会
10月22日（木）	午前・午後：アセアン中学生との交流 学校生活体験（授業、給食、掃除等） 高山市立宮中学校：インドネシア 白川村立白川中学校：フィリピン 高山市立久々野中学校：ベトナム
10月23日（金）	夜：乗鞍交流の家にてアセアン中学生との交流 ・交流ゲーム① ・ディスカッション①
10月24日（土）	午前・午後：乗鞍交流の家にてアセアン中学生との交流 ・交流ゲーム② ・ディスカッション② 夜：ホームステイ ・ホストファミリーとの交流
10月25日（日）	午前・午後：アセアン中学生とともに高山市交流プログラムに参加
10月27日（火）	夜：合同評価会のまとめ
10月28日（水）～29日（木）	代表者３名が東京プログラムへ参加
12月11日（金）	高山市・白川村生徒会サミットにて合同評価会等の報告

招聘参加者の日程　（日本人交流者：261名）

期　日	内　　容
10月20日（火）	午前：入国 午後：乗鞍青少年交流の家到着
10月21日（水）	午前：高山市役所訪問 午後：世界遺産学習（白川郷見学） 夜：日本の伝統・文化研修
10月22日（木）	午前・午後：日本人中学生との交流（中学校訪問） 高山市立宮中学校：インドネシア 白川村立白川中学校：フィリピン 高山市立久々野中学校：ベトナム 夜：評価会の提案づくり
10月23日（金）	午前：農業体験（りんご収穫体験） 午後：郷土食づくり体験 夜：日本人中学生との交流 ・交流ゲーム① ・ディスカッション①
10月24日（土）	午前・午後：日本人中学生との交流 ・交流ゲーム② ・ディスカッション② 夜：ホームステイプログラム
10月25日（日）	午前・午後：日本人中学生とともに高山市交流プログラムに参加 夜：評価会の提案づくり
10月26日（月）	午前・午後：自然体験（新穂高ロープウェイ等） 夜：評価会の提案づくり
10月27日（火）	午前：日本文化体験（花餅づくり、餅つき） 午後：研修のまとめ 夜：さよならパーティー
10月28日（水）～29日（木）	東京プログラム

（郷土食づくり体験）

（さよならパーティー）

プログラムの特徴

1．日本人参加者に対するプログラムの特徴

インドネシア･フィリピン･ベトナムの中学生との交流を3つのプロジェクトに分けて実施した。

（1）プロジェクト①（交流の家にて1泊2日）

・インドネシア、フィリピン、ベトナムの中学生と交流ゲームを行い、親睦を図った。
・お互いの国における生活習慣などを紹介し、文化の違いなどについて意見交換、ディスカッションを行った。

テーマ１　学校生活と家庭生活
テーマ２　インターネット（携帯電話）の使用について
テーマ３　産業・スポーツなどお互いの国との関係について

（2）プロジェクト②（ホームステイ）

・ホームステイを受け入れる中で、生活・文化の違いや、日本の習慣を学ぶことができた。

（3）プロジェクト③（高山の街中をエスコート）

・高山市中心部にある陣屋や古い町並みを案内・説明することでコミュニケーション能力の向上を図り、あわせて高山市の魅力について再発見できた。

（ディスカッション）

（ホームステイ）

2．招聘参加者に対するプログラムの特徴

（1）中学校を訪問し、日本の学校生活を理解

インドネシア、フィリピン、ベトナムの中学生が国ごとに分かれて日本の中学校を訪問し、授業・給食・清掃・部活動などを体験した。

（2）日本の伝統・生活文化の理解

・世界遺産の白川郷を訪問し、合掌造りの特徴や高山市内の伝統的な町並みについて学んだ。
・ホームステイにおいて、日本の生活文化を学ぶと共に家族との交流を図った。
・日本の文化のひとつ、餅つきを体験し飛騨地方に伝わる花餅作りを体験した。

（3）日本農業の理解

栽培農家の説明を受け、高原の果物であるりんごの収穫体験を行った。また、伝統食である「笹ずし」、「五平餅」づくりを体験した。

（高山交流プログラム）

（日本の伝統・文化体験）

成 果 と 課 題

1．日本人及び招聘参加者の学習内容

○高山市･白川村生徒会サミットでの発表より

私が一番心に残っているのはホームステイです。私の家にはフィリピンからリナさんがやって来ました。

リナさんは将来医者になることを目指して毎日たくさん勉強していました。家ではタガログ語で、学校では英語で過ごし、さらに日本語や他の国の言葉も独学していることに驚きました。

また、色々なことに興味や関心を示し、それに挑戦しているところが素敵だと思いました。私はリナさんの目的意識を持って一日も無駄に過ごしたくないという強い気持ちに刺激を受けました。また、東京プログラムを含めたすべての交流を通して、英会話が十分にできなかった悔しさと、国々の違いがあっても平和を思う気持ちが同じであることを感じました。私はまだ将来やりたいことがはっきりしていませんが、これから様々な経験を積んで自分を高める努力をしていきたいです。

（中学校訪問 ･授業体験）

（高山市 ･白川村生徒会サミットでの発表）

2．各施設の企画委員会開催による事業の質の向上について

昨年度の運営施設企画委員会での反省を踏まえて本年度の交流プログラムを計画した。

特に日本人中学生の参加においては、中心となるプロジェクトを3つ立ち上げ、それぞれに参加を呼びかけたが、学校訪問を行った3つの中学校の生徒だけでなく、高山市全域から参加者が集まり有意義な交流を行うことができた。

また、本年度は3か国の受入れとなったが、白川村教育委員会と高山市教育委員会の協力により1ヶ国が1校に訪問（白川中学校、久々野中学校、宮中学校の3校を訪問）することができた。さらに昨年2泊で行ったホームステイは、ホストファミリーの負担を考え1泊で実施したが、ホストファミリーからは、受入れやすくなったという感想をいただいた。本年度最後の運営施設企画委員会での反省を活かして、来年度の実施に向け進めていきたい。

3．考察（成果と課題）

○ 乗鞍青少年交流の家におけるアセアン中学生の受入れは今回で5回目となり、連続で交流活動を実施している中学校がある。アセアン中学生からは学校訪問が一番の交流体験であったと聞いている。これも昨年度の反省をふまえた各中学校の工夫した交流活動によるところが大きい。

○ ホームステイにおいて、前年の兄での受入れを経験した妹が、今年中学生になり、自分もぜひ経験したいと両親に話し、連続でホストファミリーとなった。これは、この交流事業取り組みの継続した成果の一つである。ホームステイ先の決定について、ホストファミリーをお願いする手立てとして訪問中学校に協力依頼しているが、小規模校では難しい面もあり、次年度は円滑に決定できるよう調整していきたい。昨年参加したアセアンの中学生が家族とともに再来日し、ホストファミリーとの間で家族ぐるみの交流が始まったケースもあった。

○ 高山市・白川村生徒会サミットにおいて、交流プログラム全日程に関わった白川中学校の代表生徒が、このアセアン中学生招聘交流事業で学んだことについて12校の代表者に向けて発表した。白川中学校からは、交流に関わった生徒たちが事業参加後、家庭生活・学校生活全般において積極性が増し目的意識が高まっているとの報告を受けた。

ラオス・ミャンマー
（国立江田島青少年交流の家）

日本人参加者の日程　日本人参加者（15名）の日程

期　日	内　　容
7月27日（月） ～28日（火）	開講式・オリエンテーション（事業説明） 参加者の交流（アイスブレイク） 昨年度参加者から学ぶ 目標設定、課題確認、企画の視点・留意点 交流プログラムについて【担当決定】 野外炊事に向けて、広島お好み焼き体験
8月9日（日）	交流プログラムの企画【内容検討】 ディスカッションに向けて【テーマの決定】
9月13日（日）	交流プログラムの企画【運営の準備】 ディスカッションに向けて【資料の作成】
9月20日（日）	交流プログラムの企画【運営の準備】 ディスカッションに向けて【資料の作成】
10月12日（月）	交流プログラムのリハーサル ディスカッションのリハーサル
10月21日（水）	ウェルカムパーティー【運営】
10月22日（木）	野外炊事～お好み焼パーティー～【運営】
10月23日（金）	ディスカッション（アセアン中学生とともに）
10月25日（日）	茶道・日本の遊び体験（アセアン中学生とともに）
10月27日（火）	合同発表会（アセアン中学生とともに） さよならパーティー【運営】
10月28日（水） ～29日（木）	代表者１名が東京プログラムへ参加
11月3日（火･祝）	フェスティバル江田島　発表準備
11月8日（日）	フェスティバル江田島　リハーサル
11月15日（日）	フェスティバル江田島　発表

招聘参加者の日程　（日本人交流者：63名）

期　日	内　　容
10月20日（火）	午前：入国 午後：江田島青少年交流の家　到着 夜：オリエンテーション
10月21日（水）	午前：所内案内、人間関係づくり 午後：江田島市長表敬訪問 夜：ウェルカムパーティー （企画･運営：江田島の中高生）
10月22日（木）	午前：江田島市立三高中学校訪問 午後：カッター研修 夜：野外炊事～お好み焼きパーティー （企画･運営：江田島の中高生）
10月23日（金）	午前：広島県立大柿高等学校訪問 午後：大柿自然環境体験学習交流館 「さとうみ科学館」での環境学習 夜：江田島の中高生との ディスカッション
10月24日（土）	午前：世界遺産巡り（厳島神社） 午後：ホームステイ家族と対面、 ホームステイによる日本の 生活体験
10月25日（日）	午前：ホームステイによる日本の生活体験 午後：茶道・日本の遊び体験 （江田島の中高生・地域の方々との交流） 夜：ウミホタルの観察
10月26日（月）	午前：世界遺産巡り（原爆ドーム） 午後：買物体験 夜：合同評価会（東京プログラム） 準備
10月27日（火）	午前：合同評価会準備 午後：体験の整理 夜：合同発表会（江田島の中高生とともに） さよならパーティー （企画･運営：江田島の中学生）
10月28日（水） ～30日（金）	東京プログラム

（ウェルカムパーティー〔カプラで遊ぼう〕）

（ディスカッション）

プログラムの特徴

1．日本人参加者に対するプログラムの特徴

江田島の中高生15名の国際的視野の醸成･次世代リーダーの養成をするプログラムを、7月から11月まで全8回述べ9日間の事前･事後学習を実施。

（1）交流プログラムの運営に向けた企画･立案と運営

「ウェルカムパーティー」、「野外炊事～お好み焼きパーティー～」、「さよならパーティー」の実施に向けて準備を行った。交流期間中は、招聘参加者が楽しめるように工夫した運営を行った。第1回事前学習において「昨年度参加者が今年度参加者に支援を行う時間」を設定し、リーダーとして取り組んでいく意識を高めることができた。

（2）ラオス、ミャンマー、日本とのパートナーシップに関する学習

テーマを、自分たちにとって身近な内容である「学校生活・授業」と「伝統の祭り」に設定した。まずはお互いを知るために、ラオス、ミャンマー、日本各国の状況を調べ、共通するところや違いなどを探りながら、ディスカッションの準備を進めた。ディスカッションでの意見交換を通して、お互い（3ヶ国）が、自国と相手国の現状等を理解することができた。これからは自分たちが中心となって、文化交流を通してお互いを知り尊重していくこと、そうして、さらによりよい関係を築くために自分ができること・やってみたいことを提案し合うことができた。

（3）フェスティバル江田島2015での発表

「フェスティバル江田島2015」（主催：江田島市、江田島市教育委員会、江田島青少年交流の家）において、江田島市民等に向けて、事業での取組や学んだこと、これからの自分の目指す姿などを発表した。

（昨年度参加者との交流）

（ディスカッションへ向けての準備）

2．招聘参加者に対するプログラムの特徴

（1）江田島の特色を生かした自然体験活動

江田島青少年交流の家では、メインプログラムである「カッター研修」と「ウミホタル観察」を行った。また、江田島市内にある大柿自然環境体験学習交流館「さとうみ科学館」で、海辺の生物についての講義と観察を行った。

（2）日本の地域文化を理解するプログラム（世界文化遺産巡り・地域の方々との交流）

広島平和記念公園（原爆ドームや平和記念資料館等）での平和学習や宮島（厳島神社等）の見学において、日本の地域文化を学習した。学びの舘（江田島市内）での茶道体験等において地域の方々とも交流し、江田島の地域文化に触れた。

（3）日本の学校生活を理解する交流プログラム

江田島市立三高中学校や広島県立大柿高等学校を訪問して学習活動・給食の体験を行うとともに、中学生や高校生との交流をした。日本の文化的な活動として「絵手紙」「書道」「折り紙」などに取り組んだ。

（中学校授業体験）

（茶道体験）

成 果 と 課 題

1．日本人及び招聘参加者の学習内容

○「合同発表会」・「ディスカッション」の発表内容、アンケートより

「ラオス・ミャンマーにもすばらしい文化があることわかった。ぜひ行ってみたい。」

「もっと仲良くなるためには、日本人が通訳に頼らず直接英語で話せるようになることが大切だと思った。」

「２か国のことを知り、日本と比べることができおもしろかった。」

「お互いの文化を尊重して交流していくことの大切さを感じた。ここで学んだ僕たちがこれからその架け橋になりたいと思った。」

「将来国際学校の音楽教師になりたいと思っているが、世界の伝統音楽も伝えていきたいと思った。」

（合同発表会　ラオス人参加者の発表）

（ディスカッション　発表後思いを語り合う）

2．各施設の企画委員会開催による事業の質の向上について

企画委員のプログラムでの直接指導や通訳活動等の主な参画及び活動状況は次のとおりである。

（1）日本人参加者に対するプログラム

・中学生・高校生の参加推奨及び調整。
・日本とラオス、ミャンマーのパートナーシップの構築に関するディスカッションでの指導と助言。

（2）招聘参加者に対するプログラム

・世界遺産巡り（厳島神社見学と広島平和記念公園での平和学習）における英語のガイド。
・江田島市長表敬訪問や江田島市内での体験活動プログラムの調整。

（3）企画委員会の助言による、今年度の主な事業改善点は次のとおりである。

・日本人参加者（中高生）宅へのホームステイには、コミュニケーション能力をつけるため、あえて通訳ボランティアをつけなかった。但し、夜間等の緊急事態に備えて江田島青少年交流の家に通訳ボランティアを待機させた。
・３か国のパートナーシップの構築に関するディスカッションを実施する際に、できるだけ収容人数の広い会場に変更し、日本人参加者（中高生）の保護者や学校関係者の参観ができるようにした。

3．考察（成果と課題）

○ 日本人参加者の次世代リーダー養成のポイントを交流プログラムの「ディスカッション」におき、全参加者が自分の意見を堂々と述べることができるように、意図的・計画的にプログラムを組立てた。その結果、初めは人前で話すことを苦手にしていた参加者が、多くの人が見ている前で自分の考えをしっかりと述べることができるようになり、現在、各学校のリーダーとして活躍している。（日本人参加者15名（中学校４校、高等学校１校）のうち、生徒会長１名、副会長１名、生徒会執行部２名、委員長５名）

○「この事業の良さを広める。」という昨年度の反省により、今年度は日本人プログラムが始まる前に保護者説明会（参加者同伴）を実施した。ホームステイ受け入れの増加とプログラム欠席者の減少へとつながった。

○ ディスカッションでは、日本が決めた２つのテーマに沿って３か国が発表をする。それをもとに意見交換を実施している。各国の発表時間が予定よりも長くなり、意見交換の時間が限られてしまう状況となった。今後は事前の引率者との打ち合わせを密にし、発表時間を制限し、意見交換の時間を確保したい。

Aグループ　東京プログラム（インドネシア・フィリピン・ベトナム・ラオス・ミャンマー）

10月28日（水）～ 10月30日（金）

<東京プログラム日程>

期　日	内　　容
10月28日（水）	午後：東京到着 各国大使館訪問 ※ミャンマーは大使館訪問ができなかったため、高田馬場ミャンマータウンを散策 各国留学生講話 オリエンテーション 歓迎夕食会
10月29日（木）	午前：合同評価会 午後：都内グループ研修
10月30日（金）	午前：帰国

（インドネシア大使館訪問）

＜招聘参加者の声＞

【事業全体をとおして】

今回のプログラムは私を特別な人間にしてくれた。規律正しさを学び、日本の人々と交流して文化を学び、日本を探索して新しいことを発見をすることができた。

【大使館訪問】

大使館職員の話しを聞いて、自国と日本が長い間つながりをもっていたことが分かった。

（フィリピン大使館訪問）

（ラオス大使館訪問）

（ミャンマータウン散策）

（ベトナム大使館訪問）

Aグループ評価会

日本（乗鞍）

◆交流で気づいたこと、交流を深める提案

アセアンの中学生は医者や建築家になりたいなど、将来の夢をもっているが、日本は具体的でなかったり、夢をもっていない者が多い。

さらに、日本人には英語力や積極性が不足している。日本人がもっと英語を学ぶことで、積極的に関わるようになる。

今後、日本とアセアン諸国の交流を図るためには、「英語キャンプ」を実施すればよい。

フィリピン

◆交流プログラムで驚いたこと学んだこと

驚いたことは、①日本の生徒はテクノロジーに頼らず紙とペンで勉強し、ネットではなく友達と相談し人と人とが対面している。②自分の時間に合わせるのではなく、みんなのためのペースで動く。

いろいろな国々の文化、生き方を学べた。日本とアセアンのコミュニケーション力を上げ、知識を広げ、リーダーシップ力を高めるため、若者はもっと外に出ていくべきだ。

インドネシア

◆日本とインドネシアとの共通点・相違点

日本とインドネシアは国旗の色使いが似ていたり、サッカーやバドミントンの大会で対戦しているなど関わりも多い。食文化にも共通点があり、今回のプログラムで作った五平餅とインドネシアのサテという料理は、どちらも串に刺して焼いて食べる。

プログラムを通して将来につながるフレンドシップを築くことができた。文化の共通点や相違点に関係なく、私たちはつながることができる事を学んだ。

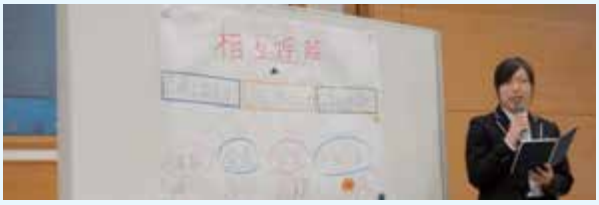
ベトナム

◆日本とベトナムの関係について

このプログラムを通して学んだことは、時間を大事にし、指示に従い一列に並ぶことができる。そして知らない人にも手を差し伸べる。帰国してもこういった日本の良いところを実践したい。

将来、２か国の関係を強めるには、英語を学んで日本人生徒とコミュニケーションが取れるようになれるとよい。言葉・文化が違うことを超えて両国の関係をよくしていきたい。

日本（江田島）



◆日本とアセアンとの交流を深めるために
　違う国に行き互いの文化に触れ、話し合うことで相互理解を深めることが重要である。それには、英語をもっと使えたり、コミュニケーション力を高めたりする必要がある。その一方、言葉を必要としない芸術、スポーツも重要である。このプログラムで、一緒に活動するだけで気持ちが近づくことを体験した。
　交流を活発にするためには、夏休みなどに交流キャンプなどを実施すればよい。

ミャンマー

◆交流を深めるために大切なこと
　この絵には「文化交流・パートナーシップ・平和」という３つの橋を描いた。
　このプログラムで互いに挨拶をしたり、日本語を学んだり文化的な交流を深めた。また、カッターで一生懸命に協力することを学んだ。日本の価値観を知り、日本人中学生と本当の友達になることができた。パートナーシップは平和につながる。このプログラムを通じて自分達はこの「橋」のような存在となる。

ラオス

◆交流で学んだこと、交流を深める提案
　日本の印象は、時間に厳しく、挨拶を大事にし、よく組織されている。そして平和を重要視する。
　日本人が大切にする挨拶はとても重要だ。互いに良い印象があれば交流が生まれ、協力状態がもてる。今以上に日本とラオスの交流を深めるには、両国のマンガのキャラクター（ポケモンとチャンピ）がコラボレーションをするキャンペーンをするなど、互いの印象をさらに良くすることが大切である。

Bグループ　地方教育施設プログラム

11月19日（木）～ 11月27日（金）

●国立花山青少年自然の家

日本

タイ

マレーシア

●国立信州高遠青少年自然の家

日本

カンボジア

ブルネイ

シンガポール

マレーシア・タイ

（国立花山青少年自然の家）

日本人参加者（13名）の日程

期　日	内　　容
10月14日（水）	事前研修① ・アセアン交流事業の意義やねらいの確認 ・交流会についての話し合い
11月10日（火）	事前研修② ・ディスカッションの持ち方、テーマの決定 ・パーティーの企画についての話し合い
11月15日（日）	事前研修③ ・相互学習（日本語学習と餅つき体験）及びパーティーの持ち方についての確認と準備
11月20日（金）	日本人中学生企画・運営によるウェルカムパーティーの開催 宿泊研修（宿泊体験、つどいへの参加）
11月21日（土）	日本語と招聘者の母国語の相互学習 ・簡単な会話、あいさつを教え合う 餅つき体験 ・日本人中学生による指導
11月22日（日）～23日（月）	ホームステイによる招聘者との交流 ※参加者13名中2名の家族が受け入れ
11月25日（水）	ディスカッション ・テーマ「あなたの好きな○○は何ですか？」 ・自分将来の夢について意見交換
11月26日（木）	フェアウェルパーティー ※日本人中学代表２名が宿泊し発表会を準備
11月27日（金）～28日（土）	代表者２名が東京プログラムへ参加

招聘参加者の日程　（日本人交流者：497名）

期　日	内　　容
11月19日（木）	午前：入国、仙台空港到着 午後：自然の家入所、職員との顔合わせ 夜：オリエンテーション
11月20日（金）	午前：ジオパーク体験①（岩手・宮城内陸地震による荒砥沢ダム地滑り崩落地での研修） 午後：市長・教育長表敬訪問 ジオパーク体験②（伊豆沼サンクチュアリーセンターでの研修とマガンのねぐら入りの観察） 夜：ウェルカムパーティー
11月21日（土）	午前：日本語学習と各母国語の相互学習 正午：餅つき体験 午後：館内オリエンテーリング（招聘者相互の交流活動） 夜：学習のまとめ
11月22日（日）	午前：自然体験活動（御駒山ハイキング） 午後：ホームステイによる日本の生活体験 夜：　〃
11月23日（月）	終日：ホームステイによる日本の生活体験 夜：学習のまとめ
11月24日（火）	午前：猊鼻渓舟下り 午後：平泉中尊寺、金色堂見学 夜：学習のまとめ
11月25日（水）	終日：中学校訪問（タイ：栗原西中学校 マレーシア：栗駒中学校） 授業体験、給食体験、全校生徒との交流会、部活動体験 夜：生徒間のディスカッション
11月26日（木）	午前：日本の食文化体験（うどん打ちと竹の器作り） 午後：日本文化体験（着物の着付け） 夜：フェアウェルパーティー
11月27日（金）～29日（日）	東京プログラム

（母国語の相互学習）

（餅つき）

プログラムの特徴

１．日本人参加者に対するプログラムの特徴

（１）中学生によるプログラムの企画･運営

訪問先の２つの中学校より公募で集まった１３名の生徒を対象にリーダー養成研修を行った。事前研修では「ウェルカムパーティー」「フェアウェルパーティー」の企画・運営を行わせ、当日の役割分担を行った。また「生徒ディスカッション」のテーマについても生徒同士の話し合いにより設定させ、主体的に活動させた。

（２）マレーシア・タイ・日本の３か国の相互理解

マレーシア、タイの中学生が日本語学習を行う際、英語講師の補助役をマンツーマンで行いながら英語と日本語の学習を行った。また、マレー語とタイ語についての学習機会も設け、相互理解に努めた。宿泊体験を設け、寝食を共に活動した。その際に行った食文化体験（餅つき）では、日本人中学生が教える役割を担った。

（３）交流活動を通しての相互理解やコミュニケーション能力の育成

交流会において訪問先の両中学校が特色ある活動（八ツ鹿踊り、白鷺太鼓、岩ヶ崎お囃子、武道等）を発表することを通して、地域や日本の文化を再認識させた。また、授業やディスカッションを通して、同世代の考えをグローバルな視点で理解すると共にコミュニケーション能力の育成を図った。

（母国語の国語相互学習）

（交流会でのお囃子披露）

２．招聘参加者に対するプログラムの特徴

（１）栗原市内中学校での授業､文化交流体験

マレーシアからの招聘者は栗駒中学校、タイからの招聘者は栗原西中学校を訪問し、活動を通して自国の学校教育との違いを体験するとともに交流を深めた。プログラム内容は、校長先生による学校概要説明、校舎見学、給食体験、授業体験、全校生徒との文化交流会、帰りの会の参加、部活動見学等である。

（２）１泊２日のホームステイによる日本の生活体験

ホストファミリーは、交流先中学校の生徒の家庭に受入れを依頼した。料理や家のお手伝い等の体験を取り入れ、家庭の普段どおりの生活を体験し、フェアウェルパーティーには全家庭に参加を呼びかけた。

（３）日本の地域文化の体験

プログラムを通して、日本・栗原地域の文化、歴史、自然について学習した。
①挨拶や自己紹介などの日本語の基本的な学習を行った。
②栗原市長・教育長表敬訪問を行い、その際の講話を通して栗原市の理解を図った。
③世界遺産（平泉中尊寺）や栗駒山麓ジオパークを見学し、栗原地域の文化や自然について学習した。
④食文化体験として餅つきやその調理（ごま餅、きな粉餅、雑煮等）、うどん打ちを体験した。
　のこぎりとなたを使い、孟宗竹を加工してうどんを盛る竹の器づくりも体験した。

（ホームステイ先での日本の生活）

（授業体験で柔道を行う）

成 果 と 課 題

1．日本人及び招聘参加者の学習内容

○「合同発表会」・「ディスカッション」の発表内容、アンケートより

「最初は参加しようか迷ったが、交流を通しながらアセアンの方々と仲良くなれた。言葉が通じなくてもジェスチャーや簡単な単語で通じ合えて良かったが、さらに英語力を身につけていきたいと思った。」

「日本人とアセアン加盟国の人とでは、考え方が違うのかなと思っていたけど、考えていることが意外と同じだったので嬉しく思った。」

「話すことが苦手だった私は、この機会に必要なことをいろいろと学べた。これからの生活に活かしていきながら、積極的に話していきたいと思った。」

（市長・教育長表敬訪問）

（生徒間のディスカッション）

2．各施設の企画委員会開催による事業の質の向上について

企画委員には昨年度から継続して参画いただき、事業の企画・運営に関する多くの建設的な意見をいただいた。

昨年の反省にもあった「中学生同士の交流時間を増やすこと」については、今年度の重点として取り組んだ。

例えばウェルカムパーティーの後に日本人中学生も自然の家に宿泊させ招聘参加者と共に生活し、交流を深めるなど本事業の成果にもつながった。また、学校交流会準備をはじめ、プログラムの企画・運営、プログラムの講師や通訳の依頼など企画委員が実施期間中も深く関わり、直接参加者への指導や支援にあたった。

企画委員によるプログラムでの直接指導等の主な参画及び活動状況は次のとおりである。

・市長・教育長表敬訪問の日程及び内容等の調整
・学校交流会の学習活動や交流会活動の受入れ
・リーダー養成研修参加生徒の募集等の調整
・ホストファミリー募集に当たっての広報や調整
・ジオパーク見学の講師選定と活動内容の調整、マガンの観察活動プログラム日程等の調整
・郷土料理の体験（うどん打ち）、伝統文化体験（竹細工）の講師選定と活動プログラム内容の調整

3．考察（成果と課題）

昨年同様、企画委員からの提案や助言を参考に、今年９月に日本ジオパークに認定された栗原市の自然体験や地元講師による日本文化体験（うどん打ち、着物の着付け、竹細工等）をプログラムに取り入れ、招聘参加者への日本の理解を深化させることができたと考える。本事業に対して御理解をいただいている栗原市長の配慮により、市長表敬訪問では市役所職員総出での歓迎を受け、招聘参加者はとても感動していた。

学校交流会では、両校の生徒による趣向を凝らした取組みにより、招聘参加者に大きな感動を与えることができた。また、招聘参加者と日本人中学生によるプログラム（語学学習、パーティーでの交流、ディスカッション等）を通して、３か国の相互理解を深めることができた。

ホームステイについては、受け入れた全てのホストファミリーから好評を得た。しかしながら、申し込み段階では、言葉の壁が大きく立ちはだかり、受入れに関して二の足を踏む家庭が多いのが現状である。ここ２年間の実績を紹介しながら、ホストファミリーの数をさらに増やすための方策が必要である。

ブルネイ・シンガポール・タイ
（国立信州高遠青少年自然の家）

日本人参加者（21名）の日程

期　日	内　　容
7月27日（月）	交流実行委員会発足会 ○交流事業概要説明
8月30日（日） ～31日（月）	第1回 交流実行委員会【アセアン合宿】 ○交流事業の詳細説明 ○アセアン各国について事前学習
9月9日（水）	第2回 交流実行委員会 ○意見交換会、高遠町オリエンテーリング打ちあわせ
10月21日（水）	第3回 交流実行委員会 ○意見交換会、ウェルカム・フェアウェルパーティー打ちあわせ
11月11日（水）	第4回 交流実行委員会 ○各企画事前準備、リハーサル
11月20日（金）	午後：第1回 高遠中学校交流 ○部活動交流 夜：ウェルカムパーティー
11月23日（月）	午前：高遠町オリエンテーリング ○地域の歴史・文化体験 午後：中学生意見交換会（アセアン生徒と）
11月24日（火）	第2回 高遠中学校交流 ○授業・給食体験 ○清掃体験、学年・全体交流会
11月26日（木）	フェアウェルパーティー
11月27日（金） ～28日（土）	代表者３名が東京プログラムへ参加
1月18日（月）	全校集会「アセアン交流実行委員会活動報告」 第5回 交流実行委員会 ○本年度アセアン交流まとめ

招聘参加者の日程　（日本人交流者：126名）

期　日	内　　容
11月19日（木）	午前：入国、成田空港・羽田空港到着 午後：国立信州高遠青少年自然の家に移動、諏訪大社参拝 夜：入所案内、オリエンテーション
11月20日（金）	午前：伊那市長・教育長表敬訪問 午後：第1回 高遠中学校訪問（部活動交流） 夜：ウェルカムパーティー
11月21日（土）	午前：「おやき・五平餅つくり」（食文化体験） 午後：ホームステイ家族との対面 夜：ホームステイによる日本の生活体験
11月22日（日）	午前：ホームステイ家族との交流 午後：ホームステイ家族との交流 夜：意見交換会準備
11月23日（月）	午前：「高遠町オリエンテーリング」中学生との交流（地域の歴史・文化体験） 午後：中学生意見交換会（高遠中学生と） 夜：研修のまとめ
11月24日（火）	午前：第2回 高遠中学校訪問（授業・給食体験） 午後：同上（清掃体験、学年・全体交流会） 夜：研修のまとめ
11月25日（水）	午前：信州大学農学部訪問（日本語補講、留学生との交流） 午後：松本城見学（日本の歴史・文化学習） 夜：研修のまとめ
11月26日（木）	午前：駒ヶ岳ロープウェイ、千畳敷カール雪山体験（日本の自然体験） 午後：駒ヶ根シルクミュージアム見学・体験（日本の文化体験） 夜：フェアウェルパーティー
11月27日（金） ～ 29日（日）	東京プログラム

（高遠中学校での国語科授業体験）

（中学生意見交換会）

プログラムの特徴

1．日本人参加者に対するプログラムの特徴

1.日本人参加者に対するプログラムのポイント

（1）中学生交流実行委員会

1年生～ 3年生計6クラスから3名ずつの委員を募り、かつ生徒会三役(3名)を加えた21名で中学生交流実行委員会を組織した。3か国をそれぞれ2つの班に分け、全中学生(全6クラス)が関われるように配慮した。

中学生交流実行委員会では、アセアン各国についての事前学習を合宿形式で行い、意見交換会・高遠町オリエンテーリング・ウェルカムパーティー・フェアウエルパーティー等に関する企画・運営を行った。

（2）中学生意見交換会

①「互いの国の良い点について」、②「互いの国の課題点について」をテーマに取り上げ、意見交換会を行った。特に互いの国が抱える課題点について話し合う中で、他国が抱える問題について深く考え、学ぶことができた。

（3）高遠町オリエンテーリング

アセアン中学生と日本人中学生6名～ 7名ずつの班を編成し、高遠町の名所・旧跡をめぐりながらコミュニケーションの輪を広げることができた。日本人中学生は英語が十分に話せないデメリットを、片言の英語と身振り手振りのボディランゲージで補いつつ交流を深めようと努力する姿が見られた。言葉が通じなくても、まず「伝えようとする心」が大切であるということを学ぶ機会となった。

（高遠町オリエンテーリング）

（フェアウェルパーティー）

2．招聘参加者に対するプログラムの特徴

（1）伊那市立高遠中学校との交流

アセアン中学生の全員が最も心に残った交流内容として挙げたのが「高遠中学校交流」であり、日本人の学校生活や文化を知る機会となった。1回目の中学校交流では、剣道・サッカー・バスケットボール部等の活動に参加し、日本人生徒と身体を動かしながら意思の疎通を図り、生徒同士の距離が縮まった。

2回目の交流では、授業体験（国語、総合、数学等）、給食体験（配膳、食事、片付け）、清掃体験（無言清掃）、学級・全校交流会に取り組んだ。学校全体が温かな雰囲気に包まれる中、互いに触れ合える場面を多く設定し、日本人中学生と友情を深め、自国の文化との違いを強く体感する機会となった。

（2）日本の文化・歴史・自然を理解するプログラム

松本城・諏訪大社の見学や、駒ヶ根シルクミュージアムでの養蚕歴史館見学・繭玉クラフト体験、千畳敷カールでの雪山体験等を通して日本の歴史・文化・自然に対する理解を増進させることができた。

（3）ホームステイによる日本の生活体験

1人ずつ各家庭にホームステイし、ホストファミリーと神社仏閣めぐり、ショッピング、たこ焼き作り体験等を行い、日本人の日常生活を味わい日本文化や習慣にふれ、ホストファミリーとの親睦を深めた。

（高遠中学校での交流）

（ホストファミリーとの交流）

成 果 と 課 題

1．日本人及び招聘参加者の学習内容

○「合同発表会」・「ディスカッション」の発表内容、アンケートより

・アセアンの皆さんが積極的にどんどん意見を出す姿に驚き、自分たちももっと頑張らなければならないと思った。
・英語を話せないため、なかなか伝わらないのがもどかしかった。英語を勉強しなければならないと強く感じた。
・言葉が通じなくても、表情や雰囲気で考えていることが何となく分かった。相手に気持ちを伝えようとする気持ちが大切だと感じた。
・来てもらうだけじゃなく、アセアンの国々へ行ってみたい。そうすればもっと互いのことを理解し合えると思う。
・日本の雪に感動した。真っ白で美しい景色が本当に素晴らしかった。
・ホームステイで、ホストファミリーの皆さんに本当に優しくしていただいた。日本人の心の温かさを感じた。
・私は日本の大学に留学することを望む。大好きになった日本でもっと学びたいと強く思う。

（市長表敬訪問）

（はじめての雪に大興奮！）

2．各施設の企画委員会開催による事業の質の向上について

・企画委員会の構成メンバーを、伊那市教育委員会・国立大学法人信州大学農学部・NPO法人伊那国際交流協会・伊那市立高遠中学校・高遠町歴史博物館の連携・協力機関から選出し、委員会を設置した。各委員から目的に応じた専門的な指導・助言を得て、事業の企画・運営を検討してきた。
・事前に綿密な打ち合わせを行い、助言を頂いていたおかげで農学部訪問や中学校訪問、市長表敬訪問を大変円滑に実施することができた。効果的な事業運営についてご意見を頂き、細やかな配慮や準備など様々な形でバックアップしていただけたことが大変ありがたかった。
・各連携機関と協議し、綿密な打ち合わせを実施してきたことにより、本事業に関わる生徒の動きや講師の講義等が大変充実していた。この連携が当事業の質的向上に直結していると言っても過言ではない。

3．考察（成果と課題）

本年度は交流実施中学校の担当教諭と実施内容について十分な検討を行った。また合宿形式の学習会を実施し、アセアン諸国の文化や教育制度に関する知識を得させ、本事業の目的や意義について深く理解できるよう指導した。合宿の中で、昨年度東京プログラムに参加した生徒２名を招き、本事業で学んだ内容を語ってもらった。

中学生意見交換会に於いては自己が居住する地域の課題や、諸外国が抱える課題について生徒達に深く考えさせる内容を設定し、その内容が合同評価会に十分活かされるよう指導を行った。

また本年度は、外国語大学に在籍する学生を通訳ボランティアとして招く制度を取り入れた。本年度主眼に置いた日本人青少年の国際的視野の醸成や、次世代リーダー育成について十分達成できたと感じる。

アセアン中学生に対しては、日本に対する理解の増進を図るべく取り組んできたが、日本文化やホストファミリーを愛する意識や、日本の大学への留学希望等、全ての招聘参加者が日本に対して好意的な気持ちを抱いてくれた。

今後の課題については、交流実施中学校の拡大が挙げられる。当施設では交流実施校を絞り、生徒間交流が非常に深いものとなるよう仕組んできたが、次年度交流実施校については他校にも拡大する方向を検討していきたい。

Bグループ　東京プログラム（マレーシア・タイ・ブルネイ・カンボジア・シンガポール）

11月27日（金）～ 11月29日（日）

<東京プログラム日程>

期　日	内　　容
11月27日（金）	午後：東京到着 各国大使館訪問 各国留学生講話 オリエンテーション 歓迎夕食会
11月28日（土）	午前：合同評価会 午後：都内グループ研修
11月29日（日）	午前：帰国

（ブルネイ大使館訪問）

＜招聘参加者の声＞

【事業全体をとおして】

　プログラムの全てに満足している。今までに来日したことはあったが、今回のように文化を経験することはなかった。そして、たくさんの友達ができた。帰りたくない。

【大使館訪問】

　自国と日本の関係について多くのことが曖昧だったが、大使館職員の説明を聞いて政治や経済関係などを理解することができた。

（カンボジア大使館訪問）

（マレーシア大使館訪問）

（タイ大使館訪問）

（シンガポール大使館訪問）

Bグループ評価会

日本（花山）

◆プロジェクト「自分の夢に向かって」
　日本、マレーシア、タイ３か国の共通点は、医者や先生として働くなど、自分のためだけではなく人のためにベストを尽くすということだ。
　私たちができることは「自分の好きなことをみつける」、「挑戦する」、「追及する」、「人の意見を吸収する」というサイクルを作ることだ。このサイクルを実現することで、自分を成長させ、人とのつながりを広めることができ、笑顔が増え、世界平和につながる。

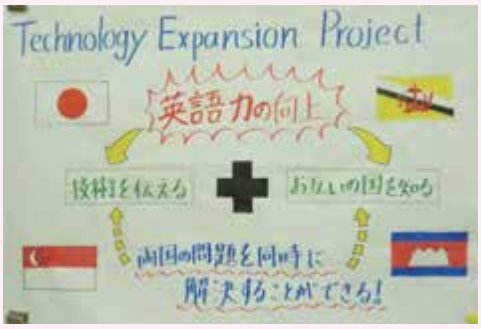
タイ

◆「『タイ・日』ワンストップエクスチェンジプログラム」
　このプロジェクトは両国の関係を深め、ハイレベルな教育が受けられることを目指す。 次の６つの活動で構成されている。①スポーツプログラム、②ホームステイ、③フードフェスティバル、④パフォーマンスショー、⑤旅行、⑥語学研修プログラムである。
　花山では、同じ場所で外国人同士が平和に暮らすことがどういうことかを知った。その経験がこのプロジェクトのベースになっている。

マレーシア

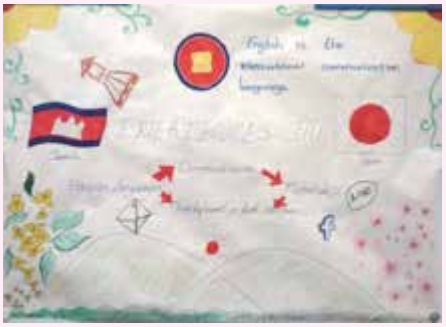
◆両国の結びつきを深める取組
　まずは両国の文化を学ぶことだ。挨拶をする時、日本ではお辞儀をするが、マレーシアではしない。文化を知ることで良い印象をもつことができる。この事業に参加して栗原市の教育制度を知ることができた。とても整っており、マレーシアが学ぶことは多い。
　また、地震でおきた山崩れの場所を訪れた。災害時には援助の手を差し伸べる必要がある。教育によって友好関係とパートナーシップを強固にできる。

日本（信州高遠）



◆「テクノロジー・エクスパンション・プロジェクト」
　日本は仕事が減少し就職率が下がっている。ブルネイは石油に頼りすぎ他の産業が発展していない。このプロジェクトでは日本の企業がブルネイに進出し日本の技術を伝える。そうすると、日本人の仕事は増え、ブルネイは石油以外の産業を得られる。
　日本人はアセアンについて知らないことが多い。ツアーや留学などを行い、交流を深めることが必要。プロジェクトを成功させるには英語力向上も必要だ。

カンボジア



◆日本とカンボジアとの交流を深めるために
　日本人は英語を使ってコミュニケーションをしない。日本人が英語を勉強すると直接のコミュニケ―ションも増えるが、ソーシャルメディアでの会話もできるため、友情を深め、信頼や産業も増やすことができる。英語の習得は世界発展につながる。
　英語習得のためには、政府が交流プログラムをつくるべきである。英語を使う機会が増えれば、英語を話せる日本人を増やすことができる。

ブルネイ

◆「プロジェクト1」
　プロジェクト１は、「一つの世界」という意味を込めている。未来を担う次の世代を教育し、世界に関心を持たせることを目的としている。今回のような交流プログラムは、ネットで記事を読むのとは比べ物にならない生の体験ができるため、今後も続いてほしい。
　さらに、教師の交換プログラムがあればよい。日本には英語の先生が必要だ。我々の活動を紹介し、ブルネイの学校や文部科学省の支援を受けたい。

シンガポール

◆日本とアセアンの交流を深める方法
　まずは、ペンフレンドをつくることだ。ペンフレンドをとおして文化を知りあい、友情を深めることができる。
　国際結婚や留学、多国籍企業で働くのもよい。
　これらの交流促進を妨げるものに、言語の壁がある。その壁を取り除くため、翻訳機能やメッセージ交換機能、語学学習サポート機能があるアプリ制作を提案したい。このアプリで人々が交流することで、日本とアセアンの関係を長く続けることができる。

調査について

アセアン10カ国からの招聘参加者各国6人、計60人と日本人参加者62人に対して、グローバル人材育成測定尺度（26項目）、外向き志向（3項目）及びリーダーシップ測定尺度（18項目）を用いて調査を行った。

グローバル人材育成測定尺度については、事業目的を踏まえ、文部科学省グローバル人材育成推進会議が整理した要素IからIIIをもとに、「IKR評定用紙（簡易版）」等をもとに国立青少年教育振興機構（国際・企画課）において作成した。外向き志向については、文部科学省より依頼のあった調査項目３問を用いた。リーダーシップ測定尺度は、リーダーが集団に果たす2つの働き「PM理論 (三隅, 1978)」を参考にし、課題達成機能 (Performance) 行動と集団維持機能 (Maintenance) 行動を問う質問項目について、国立妙高青少年自然の家が作成した「リーダーシップ測定尺度」（18項目）を用いた。

招聘参加者に対しては、事業前・事業終了直後（事業後）、日本人参加者に対しては、事前研修時及び事業後に同じ調査項目を用いて調査を実施し、各得点の平均と標準偏差を算出した。そしてアセアン各国からの招聘参加者の事業前・後の結果の差を見るため、「対応のあるサンプルのt検定」で分析した。

要素Ⅰ－①語学力、要素Ⅰ－②コミュニケーション能力
要素Ⅱ－①主体性・積極性、要素Ⅱ－②チャレンジ精神、要素Ⅱ－③協調性・柔軟性、要素Ⅱ－④責任感・使命感
要素Ⅲ－①異文化理解、要素Ⅲ－②日本人としてのアイデンティティ
外向き志向、リーダーシップ（事業趣旨）

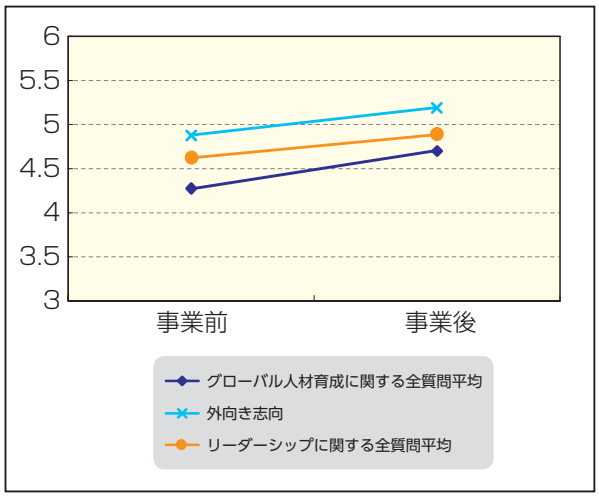
			要　素	質 問 項 目
1	グローバル人材育成尺度	要素Ⅰ	①語学力	英語で自己紹介ができる
2				外国の人に英語で話しかけることができる
3				将来外国の学校に行きたい
4				将来外国の会社ではたらきたい
5			②コミュニケーション能力	だれにでも話しかけることができる
6				人の話しをきちんと聞くことができる
7				人のために何かをしてあげるのが好きだ
8				人の心の痛みがわかる
9		要素Ⅱ	①主体性・積極性	自分からすすんで何でもやる
10				前むきに、物事を考えられる
11				先を見通して、自分で計画が立てられる
12			②チャレンジ精神	小さな失敗をおそれない
13				うまくいくようにいろいろな工夫することができる
14				新しいことに挑戦したい
15			③協調性・柔軟性	だれとでも仲よくできる
16				その場にふさわしい行動ができる
17				自分かってな、わがままを言わない
18			④責任感・使命感	いやがらずに、よく働く
19				自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる
20				自分がするべき役割をはっきりわかっている
21		要素Ⅲ	①異文化理解	交流国の文化(日常生活等)を理解している
22				交流国の歴史を理解している
23				初めての環境に自分からなじもうと努力する
24			②日本人としてのアイデンティティ	日本の文化(日常生活等)を説明することができる
25				日本の歴史を説明することができる
26				日本人としての良さを説明できる
27	外向き志向			日本人として世界に貢献したい
28				外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい
29				交流した外国の人と将来もつながりをもちたい
30	リーダーシップ測定尺度	課題達成機能		人が嫌がることでも自分から進んで取り組むことができる
31				すすんでお手伝いや勉強をすることができる
32				危ないことを予測して避けることができる
33				その場の状況にあわせて考えることができる
34				決めた時間にあわせて行動することができる
35				先のことを考えて行動することができる
36				内容を考えて話すことができる
37				反省したことを次の行動や活動に生かしている
38				物事をいろいろな方向から見ることができる
39				わからないことは自分で調べることができる
40				興味のあることにチャレンジしてみたい
41		集団維持機能		全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる
42				ルールや約束を必ず守ることができる
43				親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる
44				困っている友だちがいたら励ますことができる
45				友だちの立場に立って話を聞くことができる
46				明るく元気にあいさつや返事ができる
47				場を和ますことができる

調査結果

1．日本人に対する調査

		平均点			t 値	p 値	有意差
		事業前	事業後	変化			
グローバル人材育成尺度	**グローバル人材育成に関する全質問平均**	**4.27**	**4.69**	**0.42**	**-5.63**	**.000**	*
	要素Ⅰ	**4.20**	**4.64**	**0.44**	**-5.29**	**.000**	*
	語学力	3.68	4.30	0.62	-4.93	.000	*
	コミュニケーション能力	4.72	4.99	0.27	-3.65	.001	*
	要素Ⅱ	**4.63**	**4.84**	**0.21**	**-2.93**	**.005**	*
	主体性・積極性	4.50	4.80	0.30	-3.34	.001	*
	チャレンジ精神	4.69	4.99	0.31	-3.71	.000	*
	協調性・柔軟性	4.63	4.74	0.11	-1.24	.219	
	責任感・使命感	4.69	4.83	0.13	-1.49	.141	
	要素Ⅲ	**3.98**	**4.59**	**0.61**	**-5.81**	**.000**	*
	異文化理解	3.78	4.63	0.84	-6.96	.000	*
	～人としてのアイデンティティ	4.18	4.54	0.37	-2.86	.006	*
外向き志向		4.88	5.18	0.31	-2.63	.011	*
リーダーシップ	**リーダーシップに関する全質問平均**	**4.61**	**4.87**	**0.26**	**-3.41**	**.001**	*
	課題達成機能	4.53	4.84	0.31	-3.83	.000	*
	集団維持機能	4.73	4.91	0.17	-2.13	.038	*

*統計的手法を用いて分析を行った結果、統計的に意味がある差が見られた項目(p<0,05)



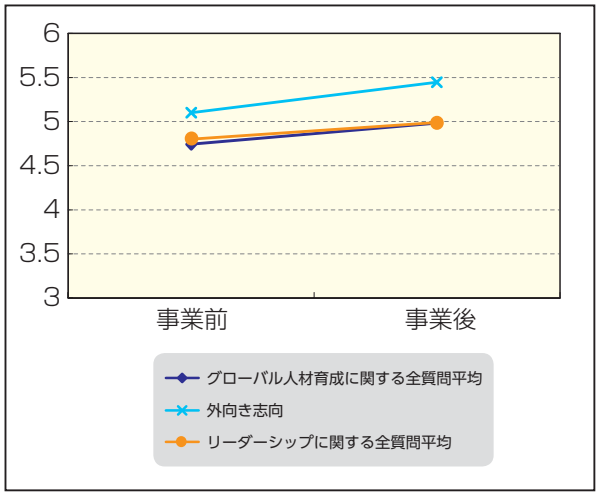
日本人参加者６２名の回答を分析したところ、「グローバル人材の育成」、「外向き志向」、「リーダーシップ」に関して統計学的に有意な点数の上昇がみられた。

参加した中高生が、交流体験やディスカッションなどを経験することで、グローバル人材育成尺度の点数や外向き志向の点数が上昇し、招聘者を受け入れるプログラム（文化体験会や歓迎パーティーなど）を企画運営することで、リーダーシップに関する点数も上昇したと考えられる。

2. 招聘参加者に対する調査

		平均点			t 値	p 値	有意差
		事業前	事業後	変化			
グローバル人材育成尺度	**グローバル人材育成に関する全質問平均**	**4.75**	**5.00**	**0.25**	**-4.54**	**.000**	*
	要素Ⅰ	**5.01**	**5.23**	**0.21**	**-3.40**	**.001**	*
	語学力	5.24	5.46	0.22	-3.09	.003	*
	コミュニケーション能力	4.78	4.99	0.21	-2.79	.007	*
	要素Ⅱ	**4.81**	**4.97**	**0.16**	**-2.50**	**.015**	*
	主体性・積極性	4.96	5.06	0.10	-1.20	.236	
	チャレンジ精神	4.64	4.84	0.20	-2.43	.018	*
	協調性・柔軟性	4.76	4.91	0.16	-2.19	.033	*
	責任感・使命感	4.88	5.05	0.17	-1.88	.065	
	要素Ⅲ	**4.42**	**4.81**	**0.39**	**-5.27**	**.000**	*
	異文化理解	4.14	4.71	0.56	-6.02	.000	*
	～人としてのアイデンティティ	4.69	4.91	0.22	-2.63	.011	*
外向き志向		5.11	5.46	0.35	-4.26	.000	*
リーダーシップ	**リーダーシップに関する全質問平均**	**4.81**	**5.00**	**0.19**	**-3.37**	**.001**	*
	課題達成機能	4.78	4.99	0.21	-3.64	.001	*
	集団維持機能	4.86	5.00	0.15	-2.22	.030	*

*統計的手法を用いて分析を行った結果、統計的に意味がある差が見られた項目(p<0,05)

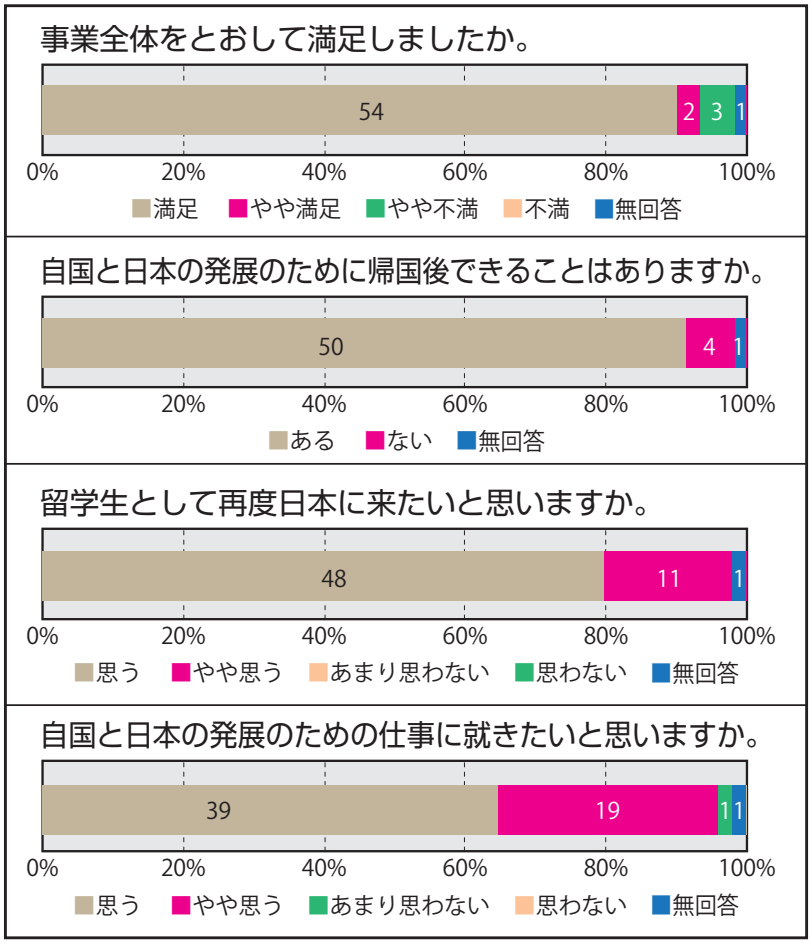


招聘参加者６０名の回答を分析したところ、「グローバル人材の育成」、「外向き志向」、「リーダーシップ」に関して統計学的に有意な点数の上昇がみられた。

日本の中学校を訪問したり、各施設での交流プログラムやホームステイを経験することで日本の文化を体験する機会や、日本人とディスカッションや交流する機会が多かったことから、３項目の点数が上昇したと考えられる。

アンケート調査

アセアン加盟国中学生（N=60名）



（留学生講話〔東京〕）

（日本人と招聘参加者交流〔東京〕）

帰国後の様子

＜各国での報告会＞

・ラオスチームは６名中５名はそれぞれのクラスで報告会を実施し、残りの１名は、約100名の参加者を集めた報告会を実施した。報告会の参加者は日本のことを好きになり、日本に行きたいという感想をもった。（ラオス）

・帰国後、学年集会で発表会を行った。評価会で発表したプロジェクトを実行するため、ブルネイの留学生会にメールで支援を依頼している。学校も協力的で、高遠中学校の生徒や国立信州高遠青少年自然の家のスタッフとスカイプで情報交換を行った。今後は、日本大使館やブルネイ文部省に支援の相談をする予定である。（ブルネイ）

＜招聘参加者の様子＞

・帰国してすぐに日本での留学プログラムについて調べた参加者もいた。日本語ができていると思っていた参加者は、自分の日本語能力に不足を感じ、７月に資格試験に挑戦することを決意している。（ベトナム）

・時間を守るようになったり、日本のゴミの捨て方を真似して学校や家庭で取り組んでいる。
その他にも、日本に留学できるように塾に行く時間を増やしたり、毎週土日に日本語学校に通いはじめた参加者もいる。（ラオス）

平成27（2015）年度　文部科学省委託事業
アセアン加盟国中学生招聘交流事業報告書

平成28年２月発行

編集発行
◆
国立青少年教育振興機構　国際・企画課
http://www.niye.go.jp/
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町3-1
TEL　03-6407-7753

体験の風をおこそう

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構